

日 本 国 特 許 庁  
JAPAN PATENT OFFICE

21.12.2004

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日            2 0 0 3 年 1 1 月 1 4 日  
Date of Application:

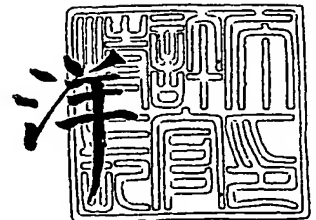
出 願 番 号            特 願 2 0 0 3 - 3 8 4 7 5 9  
Application Number:  
[ST. 10/C]:            [ J P 2 0 0 3 - 3 8 4 7 5 9 ]

出    願    人            株 式 会 社 資 生 堂  
Applicant(s):

2 0 0 4 年 1 2 月 1 7 日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

小 川



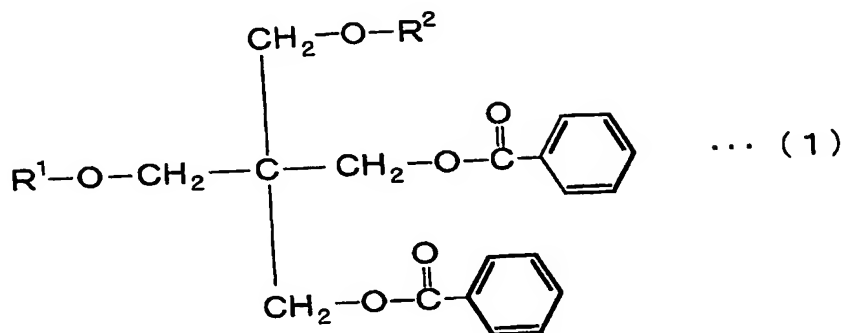
【書類名】 特許願  
【整理番号】 03128-5029  
【提出日】 平成15年11月14日  
【あて先】 特許庁長官殿  
【国際特許分類】 A61K 07/00  
【発明者】  
    【住所又は居所】 神奈川県横浜市都筑区早渕 2-2-1 株式会社資生堂 リサーチセンター（新横浜）内  
        【氏名】 山崎 一徳  
【発明者】  
    【住所又は居所】 神奈川県横浜市都筑区早渕 2-2-1 株式会社資生堂 リサーチセンター（新横浜）内  
        【氏名】 小倉 悠紀  
【発明者】  
    【住所又は居所】 神奈川県横浜市都筑区早渕 2-2-1 株式会社資生堂 リサーチセンター（新横浜）内  
        【氏名】 細川 欣哉  
【発明者】  
    【住所又は居所】 神奈川県横浜市都筑区早渕 2-2-1 株式会社資生堂 リサーチセンター（新横浜）内  
        【氏名】 南 孝司  
【発明者】  
    【住所又は居所】 神奈川県横浜市都筑区早渕 2-2-1 株式会社資生堂 リサーチセンター（新横浜）内  
        【氏名】 中根 俊彦  
【特許出願人】  
    【識別番号】 000001959  
    【氏名又は名称】 株式会社資生堂  
【代理人】  
    【識別番号】 100090527  
    【弁理士】  
    【氏名又は名称】 館野 千恵子  
    【電話番号】 03-5731-9081  
【手数料の表示】  
    【予納台帳番号】 011084  
    【納付金額】 21,000円  
【提出物件の目録】  
    【物件名】 特許請求の範囲 1  
    【物件名】 明細書 1  
    【物件名】 要約書 1  
    【包括委任状番号】 9107593

## 【書類名】特許請求の範囲

## 【請求項 1】

下記一般式 (1) で表されるペンタエリスリトールと安息香酸のエステルを配合することとを特徴とする化粧料。

## 【化 1】



(式中、 $\text{R}^1$ 、 $\text{R}^2$ は水素原子または炭素数 1～24 の直鎖或いは分岐鎖の脂肪酸残基、若しくは安息香酸残基を表す。)

## 【請求項 2】

前記一般式 (1) で表されるペンタエリスリトールと安息香酸のエステルの  $\text{R}^1$  が 2-エチルヘキサン酸残基であり、 $\text{R}^2$  が安息香酸残基であることを特徴とする請求項 1 に記載の化粧料。

## 【請求項 3】

前記一般式 (1) で表されるペンタエリスリトールと安息香酸のエステルを 5～80 質量%配合することを特徴とする請求項 1 に記載の化粧料。

## 【請求項 4】

口紅であることを特徴とする請求項 1～3 のいずれかに記載の化粧料。

【書類名】明細書

【発明の名称】化粧料

【技術分野】

【0001】

本発明は化粧料に関するものであり、特にその使用時のつや、うるおい感などが改善された口紅化粧料、アイシャドウ化粧料および頭髮化粧料等の一般的な化粧料に関する。

【背景技術】

【0002】

従来、化粧料において、特に通常の口紅化粧料については、各種油分、ワックス、色材、保湿剤等で構成され、その使用時の特性として口唇に塗布する時なめらかにのびて塗り易いこと、上下の口唇が接触した時のべたつきがないこと、口唇上である程度のつやがあること、うるおい感があること、匂いが少ないこと等が要求されてきたが、特に近年、口唇上でのつやとうるおい感が重要視されてきており、従来の技術では口唇上でのつやとうるおい感が十分でないという欠点を有していた。この欠点を解消し、口唇上でのつやとうるおい感を向上させるため、従来より種々の検討がなされて来たが未だに十分な水準に至っていない。

【0003】

本願と関連性の深いペンタエリスリトール誘導体系の油分を配合した化粧料については、ジペンタエリトリットと直鎖脂肪酸のエステルを配合した化粧料（例えば特許文献1）、ジペンタエリトリットと直鎖脂肪酸および二塩基酸とを反応させて得られるエステルを配合した化粧料（例えば特許文献2）、テトラ-2-エチルヘキサン酸ペンタエリスリトールエステルを配合した化粧料（例えば特許文献3）、ペンタエリスリトールと脂肪酸およびメトキシケイ皮酸とのエステルを配合した化粧料（例えば特許文献4）、さらに特定構造のペンタエリスリトール誘導体を含有する化粧料（例えば特許文献5）が開示されている。

【特許文献1】特開昭55-85509号公報

【特許文献2】特公昭61-7165号公報

【特許文献3】特開平06-87730号公報

【特許文献4】特開平10-45552号公報

【特許文献5】特開平5-85981号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0004】

しかしながら、これらの開示されているペンタエリスリトール誘導体系の油分を用いた化粧料において、特に口紅化粧料については、塗布のし易さ、べたつき、匂いにおいてはある程度の機能を有してはいるが、口唇上でのつや、うるおい感に対しては十分な効果を発揮するものではなかった。

【0005】

そこで本発明は、口紅化粧料の場合は、口唇に塗布する時なめらかにのびて塗り易く、べたつきがなく、匂いも良好で、口唇上でのつやに極めて優れ、またうるおい感にも優れ、またアイシャドウ化粧料の場合はつやと化粧もちに優れ、さらに頭髮化粧料の場合はつやと整髪力に優れた化粧料を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0006】

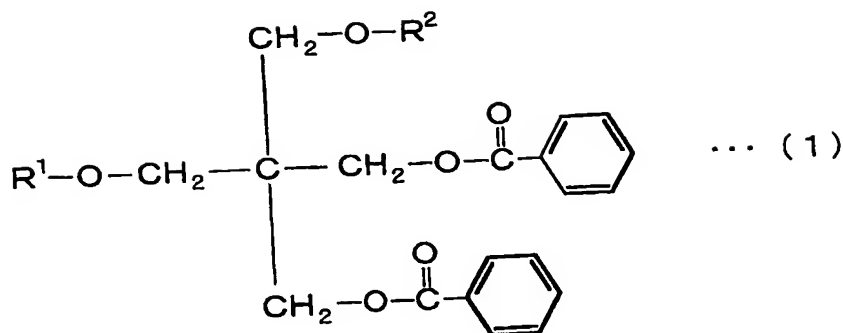
本発明者等は、このような現状に鑑み、鋭意研究を重ねた結果、特定のペンタエリスリトールと安息香酸のエステルを配合すると、例えば口紅とした場合には、口唇上でのつや、うるおい感の向上が顕著となるとの新たな知見を見出し、本発明を完成するに至った。

【0007】

すなわち、本発明は、下記一般式（1）で表されるペンタエリスリトールと安息香酸のエステルを配合することを特徴とする化粧料である。

【0008】

【化2】



【0009】

(式中、 $\text{R}^1$ 、 $\text{R}^2$ は水素原子または炭素数1～24の直鎖或いは分岐鎖の脂肪酸残基、若しくは安息香酸残基を表す。)

【発明の効果】

【0010】

本発明の化粧料によれば、例えば口唇に塗布する時なめらかにのびて塗り易く、べたつきがなく、匂いも良好で、口唇上でのつやに極めて優れ、またうるおい感にも優れた口紅化粧料とすることができる。また、使用時のつやと化粧もちに優れたアイシャドウ化粧料や、つやと整髪力に優れた頭髮化粧料を提供することができる。

【発明を実施するための最良の形態】

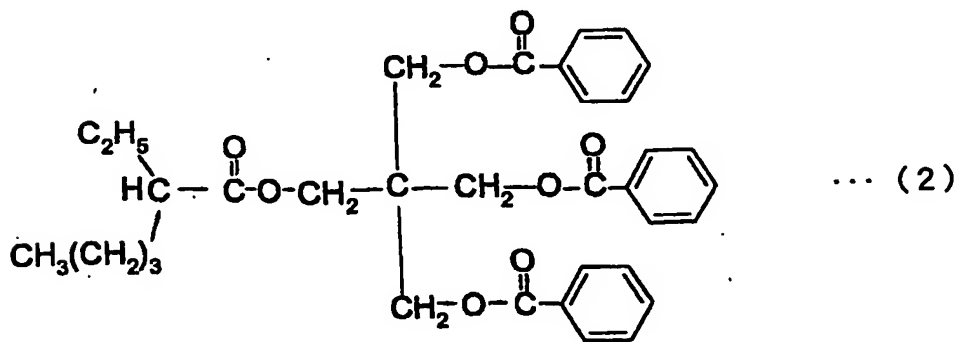
【0011】

以下、本発明を詳述する。

本発明の化粧料に配合する前記一般式(1)で表されるペンタエリスリトールと安息香酸のエステルの配合例として、 $\text{R}^1$ が炭素数8の2-エチルヘキサン酸残基であり、 $\text{R}^2$ が安息香酸残基のエステルである下記式(2)で表されるものが好適である。

【0012】

【化3】



【0013】

この安息香酸残基のエステルは、1モルのペンタエリスリトールと3モルの安息香酸および1モルの2-エチルヘキサン酸をエステル化反応させた後、未反応物除去、脱色処理、次いで脱臭処理をして得ることができる。

【0014】

ペンタエリスリトールと安息香酸のエステルの配合量は、口紅化粧料の場合、その全量に対して5～80質量%の範囲が好ましく、より好ましくは10～60質量%である。こ

の配合量が5質量%未満であると口唇上でのつや、うるおい感の向上効果が十分でなく、またこの配合量が80質量%を越える範囲では上下の口唇が接触した時のべたつきが不良となり好ましくない。

#### 【0015】

本発明の化粧料において、例えば口紅化粧料の場合には、口唇に塗布する時になめらかにのびて塗り易く、べたつきがなく、うるおい感があり、口唇上でのつやに極めて優れるという特有の効果を得るために、またその他の化粧料においてもつやと化粧持ちあるいは整髪力を付与するために、上記の必須成分に加え、必要に応じ、本発明の効果を損なわない質的、量的範囲で通常の化粧品、医薬品分野で用いられるその他の成分を配合することができる。

#### 【0016】

油分としては、スクワラン、流動パラフィン、ワセリン等の炭化水素油、ミリスチン酸、パルミチン酸、ステアリン酸、12-ヒドロキシステアリン酸、ベヘニン酸等の高級脂肪酸、セチルアルコール、ステアリルアルコール、オレイルアルコール、バチルアルコール等の高級アルコール、セチルー2-エチルヘキサノエート、2-エチルヘキシルパルミテート、2-オクチルドデシルミリステート、ネオペンチルグリコール-2-エチルヘキサノエート、トリオクタン酸グリセリル、テトラオクタン酸ペンタエリスリトール、トリイソステアリン酸グリセリル、ジイソステアリン酸グリセリル、イソプロピルミリステート、ミリスチルミリステート、トリオレイン酸グリセリル等のエステル類、オリーブ油、アボカド油、ホホバ油、ヒマワリ油、サフラワー油、椿油、マカデミアナッツ油、ミンク油、ラノリン、液状ラノリン、酢酸ラノリン、ヒマシ油等の油脂、ジメチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、高重合度のガム状ジメチルポリシロキサン、ポリエーテル変性シリコーン、アミノ変性シリコーン等のシリコーン系油分、フッ素変性ジメチルポリシロキサン、フッ素変性メチルフェニルポリシロキサン、パーフロロポリエーテル、パーフロロカーボン等のフッ素系油分等が挙げられる。

#### 【0017】

ワックスとしては、例えば、カルナバロウ、キャンデリラロウ、ビースワックス、モクロウ、セレシンワックス、マイクロクリスタリンワックス、固形パラフィンワックス等が挙げられる。

#### 【0018】

保湿剤としては、例えば、グリセリン、プロピレングリコール、1,3-ブチレングリコール等の多価アルコール系保湿剤が挙げられる。

#### 【0019】

その他、各種乳化剤、界面活性剤、増粘剤、ゲル化剤、金属石鹸、水溶性高分子、油溶性高分子、薬剤、酸化防止剤、顔料、染料、パール剤、ラメ剤、有機・無機粉末、香料等を配合することができる。

#### 【0020】

本発明の化粧料は、上記必須成分を含む配合成分を加熱攪拌混合して、脱気、容器充填、冷却することにより製造される。本発明の化粧料の剤型は任意であり、例えばスティック状、ペンシル状、ペースト状、液状が可能であり、さらに水、保湿剤を配合したW/O乳化系も可能である。

#### 【0021】

本発明の化粧料は、口紅化粧料、アイシャドウ化粧料および頭髮化粧料等の一般的な化粧料に適用でき、特に繰り出し容器に入れたスティック状、ペンシル状、中皿へ流し込み充填したペースト状、塗布具内蔵筒型容器に充填した液状等の化粧料であり、口紅化粧料の場合、口紅の他、色材を配合しないリップグロス、リップクリーム等にも応用することが可能である。

#### 【実施例】

#### 【0022】

次に、本発明の実施例について説明する。

本発明は以下に挙げる実施例のみに限定されるものではなく、本発明の主旨を逸脱しない範囲で種々の変更が可能である。なお、以下の記載においては配合量の単位は何れも質量%である。

## 【0023】

実施例 1, 2 および 比較例 1, 2 (口紅化粧料)

下記表 1 に示した各処方成分を 85℃ に加熱し、攪拌混合、脱気した後、口紅容器に充填し、5℃ まで冷却して口紅を得た。表 1 において実施例 1, 2 の本発明のペンタエリスリトールと安息香酸のエステルは上記一般式 (2) で表されるものを用いた。

## 【0024】

また、比較例 1 のテトラ 2-エチルヘキサン酸ペンタエリスリトールエステルは前述の特許文献 3 に記載のものを用いた。また、表 1 において比較例 2 の 2-エチルヘキサン酸・メトキシケイ皮酸ペンタエリスリトールエステルは前述の特許文献 4 に記載のペンタエリスリトールが 1 モル、2-エチルヘキサン酸が 3 モル、メトキシケイ皮酸が 1 モルのものを用いた。その他の成分は化粧料用原料として一般に市販されているものを用いた。

## 【0025】

## 【表 1】

	実施例 1	実施例 2	比較例 1	比較例 2
トリ安息香酸・モノ 2-エチルヘキサン酸 ペンタエリスリトールエステル	30	50	-	-
テトラ 2-エチルヘキサン酸ペンタエリス リトールエステル	-	-	30	-
2-エチルヘキサン酸・メトキシケイ皮酸 ペンタエリスリトールエステル	-	-	-	30
スクワラン	5	5	5	5
メチルフェニルポリシロキサン 20cs	5	5	5	5
リンゴ酸ジイステアリル	10	10	10	10
ジイステアリン酸グリセリル	10	-	10	10
トリ 2-エチルヘキサン酸グリセリル	10	-	10	10
トリメチルペンタフェニルトリシロキサン	10	10	10	10
セリンワックス	11	11	11	11
マイクロクリスタリンワックス	2	2	2	2
シリコーン被覆赤色系顔料	4	4	4	4
ベンガラ被覆雲母チタン	3	3	3	3
香 料	適量	適量	適量	適量
合計	100	100	100	100

## 【0026】

(口紅化粧料の評価)

各実施例および比較例の口紅化粧料の作用効果につき、パネル 10 名により、塗布のし易さ、上唇と下唇が接触した時のべたつき (塗布直後～2 時間後)、口唇上でのつや (塗布直後～2 時間後)、うるおい感 (塗布直後～2 時間後) の使用テストによる評価を行った。なお評価基準は次のように定めた。

## 【0027】

(評価基準)

- A: 10名中8名以上が良好とした。  
 B: 10名中6名以上、8名未満が良好とした。  
 C: 10名中4名以上、6名未満が良好とした。  
 D: 10名中3名以下が良好とした。  
 評価結果を下記表2に示す。

【0028】

【表2】

	実施例 1	実施例 2	比較例 1	比較例 2
塗布のし易さ	B	B	B	B
べたつき	B	B	B	B
口唇上でのつや	B	A	D	C
うるおい感	B	A	C	C

【0029】

表2から明らかなように、本発明のペンタエリスリトールと安息香酸のエステルを配合した実施例1、2の口紅化粧料は、上記特許文献3に記載のテトラ-2-エチルヘキサン酸ペンタエリスリトールエステルを配合した比較例1および上記特許文献4に記載のペンタエリスリトールと脂肪酸・メトキシケイ皮酸とのエステルを配合した比較例2の口紅化粧料に比較し、特に口唇上でのつやおよびうるおい感に優れていることが判る。

【0030】

実施例3 (アイシャドウ化粧料)

ペンタエリスリトール・安息香酸エステル	30	質量%
トリ2-エチルヘキサン酸グリセリル	10	
メチルフェニルポリシロキサン	5	
セレシンワックス	11	
カルナバロウ	1	
セスキオレイン酸ソルビタン	2	
酸化チタン	3	
雲母チタン	15	
マイカ	20	
群青	2	
黒酸化鉄	1	
香料	適量	

【0031】

この例のペンタエリスリトール・安息香酸エステルは、前記実施例1の場合と同一のものをを用いた。また、その他の成分は化粧料用原料として一般に市販されているものを用いた。この例に示した各処方成分を85℃に加熱し、攪拌混合、脱気した後、スティック容器に充填し、5℃まで冷却してアイシャドウ用組成物を得た。

【0032】

(アイシャドウ化粧料の評価)

実施例3のアイシャドウ化粧料の作用効果につき前記10名のパネルで評価した結果、つやはA(10名中8名以上が良好)で、また化粧もちも良好であった。

【0033】

実施例4 (頭髮化粧料)

ペンタエリスリトール・安息香酸エステル	40	質量%
ポリオキシプロピレン(40)ブチルエーテル	26	
親油型モノステアリン酸グリセリン	8	



自己乳化型モノステアリン酸グリセリン	10
サラシミツロウ	10
モクロウ	5
カルナバロウ	1
香料	適量

## 【0034】

この例のペンタエリスリトール・安息香酸エステルは、前記実施例1の場合と同一のものをを用いた。また、その他の成分は化粧料用原料として一般に市販されているものをを用いた。この例に示した各処方成分を85℃に加熱し、攪拌混合、脱気した後、スティック容器に充填し、5℃まで冷却して頭髮化粧料を得た。

## 【0035】

(頭髮化粧料の評価)

この例の頭髮化粧料の作用効果につき前記10名のパネルで評価した結果、つやはA(10名中8名以上が良好)で、また整髪力も良好であった。

## 【0036】

実施例5(乳化クリーム状頭髮化粧料)

ペンタエリスリトール・安息香酸エステル	5	質量%
ジメチルポリシロキサン	10	
SILWET 236-L(日本ユニカー)	0.1	
ポリオキシエチレンメチルポリシロキサン共重合体	0.2	
エタノール	10	
プロピレングリコール	5	
2-アミノ-2-メチル-1-プロパノール	適量	
エデト酸3ナトリウム	適量	
キサンタンガム	0.1	
酢酸ビニル・ビニルピロリドン共重合体	0.5	
アクリル酸・メタクリル酸アルキル共重合体	0.2	
カルボキシビニルポリマー	0.4	
高重合ジメチルシロキサン・		
メチル(アミノプロピル)シロキサン共重合体	0.5	
高重合ジメチルポリシロキサン	1	
精製水	67	
香料	適量	

## 【0037】

この例のペンタエリスリトール・安息香酸エステルは、前記実施例1の場合と同一のものをを用いた。また、その他の成分は化粧料用原料として一般に市販されているものをを用いた。この例に示した各処方成分を室温で攪拌混合(乳化)して脱気した後、ガラスビン容器に充填し、乳化クリーム状頭髮化粧料を得た。

## 【0038】

(乳化クリーム状頭髮化粧料の評価)

この例の乳化クリーム状頭髮化粧料の作用効果につき前記10名のパネルで評価した結果、つやはA(10名中8名以上が良好)で、また整髪力も良好であった。

## 【0039】

実施例6(ネールエナメル化粧料)

ペンタエリスリトール・安息香酸エステル	12	質量%
ニトロセルロース	20	
クエン酸アセチルトリブチル	6	
酢酸エチル	25	
酢酸ブチル	33	
ポリオキシエチレンアルキルエーテルリン酸	0.1	

塩化ポリオキシプロピレンメチルジエチルアンモニウム	0.5
アルキル変性シリコン樹脂被覆酸化チタン	0.5
ベンガラ被覆雲母チタン	0.7
ステアリン酸カルシウム	0.1
クエン酸	0.1
D-カンフル	1
ベンガラ	適量
黄酸化鉄	適量
黒酸化鉄	適量
赤色 220 号	適量
赤色 226 号	適量
ベンジルジメチルステアリルアンモニウムヘクトライト	1

## 【0040】

この例のペンタエリスリトール・安息香酸エステルは、前記実施例 1 の場合と同一のものをを用いた。また、その他の成分は化粧料用原料として一般に市販されているものをを用いた。この例に示した各処方成分を室温で攪拌溶解・混合した後、筆付きガラスビン容器に充填してネールエナメル化粧料を得た。

## 【0041】

(ネールエナメル化粧料の評価)

この例のネールエナメル化粧料の作用効果につき前記 10 名のパネルで評価した結果、つやは A (10 名中 8 名以上が良好) で、また化粧もちも良好であった。

## 【0042】

実施例 7 (液状リップグロス化粧料)

ペンタエリスリトール・安息香酸エステル	60	質量%
リンゴ酸ジイソステアリル	15	
メチルフェニルポリシロキサン	5	
セレシン	5	
ポリエチレンテレフタレート・ポリメチルメタクリレート積層フィルム末	3	
シリコーン被覆赤色酸化鉄	3	
ベンガラ被覆雲母チタン	2	
ポリオキシエチレン・メチルポリシロキサン共重合体	1	
1,3-ブチレングリコール	3	
塩化カルシウム	0.1	
パラベン	適量	
ラポナイト	1.5	
精製水	1.4	

## 【0043】

この例のペンタエリスリトール・安息香酸エステルは、前記実施例 1 の場合と同一のものをを用いた。また、その他の成分は化粧料用原料として一般に市販されているものをを用いた。この例に示した各処方成分の内、1,3-ブチレングリコール、塩化カルシウム、ラポナイト、精製水を攪拌混合して 85℃ に加熱し、これを同温で加熱混合したその他の成分に添加して、全体を攪拌混合、脱気した後、塗布具チップの付いた容器に充填し、5℃ まで冷却して液状リップグロス化粧料を得た。

## 【0044】

(液状リップグロス化粧料の評価)

この例の液状リップグロス化粧料の作用効果につき前記 10 名のパネルで評価した結果、つやは A (10 名中 8 名以上が良好) で、また化粧もちも良好であった。

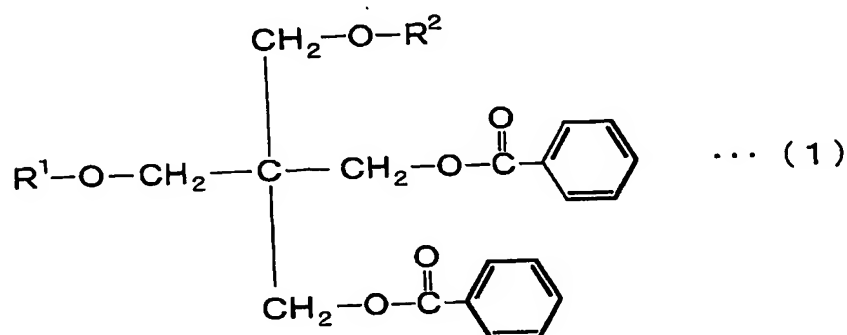
## 【書類名】要約書

## 【要約】

【課題】 口唇に塗布する時なめらかにのびて塗り易く、べたつきがなく、匂いも良好で、口唇上でのつやに極めて優れ、またうるおい感にも優れる口紅化粧料や、つやと化粧もちに優れるアイシャドウ化粧料や、つやと整髪力に優れる頭髮化粧料のような化粧料を提供する。

【解決手段】 下記一般式(1)で表されるペンタエリスリトールと安息香酸のエステルを配合する。

## 【化1】



(式中、 $\text{R}^1$ 、 $\text{R}^2$ は水素原子または炭素数1～24の直鎖或いは分岐鎖の脂肪酸残基、若しくは安息香酸残基を表す。)

【選択図】 なし

特願 2003-384759

出願人履歴情報

識別番号

[000001959]

1. 変更年月日

1990年 8月27日

[変更理由]

新規登録

住 所

東京都中央区銀座7丁目5番5号

氏 名

株式会社資生堂

# Document made available under the Patent Cooperation Treaty (PCT)

International application number: PCT/JP04/017110

International filing date: 11 November 2004 (11.11.2004)

Document type: Certified copy of priority document

Document details: Country/Office: JP  
Number: 2003-384759|  
Filing date: 14 November 2003 (14.11.2003)

Date of receipt at the International Bureau: 20 January 2005 (20.01.2005)

Remark: Priority document submitted or transmitted to the International Bureau in compliance with Rule 17.1(a) or (b)



World Intellectual Property Organization (WIPO) - Geneva, Switzerland  
Organisation Mondiale de la Propriété Intellectuelle (OMPI) - Genève, Suisse